課題名：

病理病期T2N0M0非小細胞肺がんにおける閉塞性肺炎の有無が予後に与える影響についてのレトロスペクティブ研究

1.1.研究対象:

1998 年 1 月～2010 年 11 月の期間に国立研究開発法人　国立がん研究センター東病院呼吸器外科で手術が施行された、病理病期 T2N0M0 非小細胞肺がん患者さんを対象とします。

2.1.研究の概要:

国内において肺がんは死亡数がもっとも多いがんで、非小細胞肺がんが大半を占めていると言われています。肺がんの進行度を現す指標には、国際対がん連合の定めるTNM分類が用いられます。TNM分類の中で、T因子とは、がんの原発巣そのものに関する情報が規定されておりますが、それ以外にもがんに伴って生じる閉塞性肺炎や無気肺など、がんの原発巣に付随した情報についても一部に規定および分類がされております。がんに関する一般的な事項として、炎症を伴うがんが悪い経過をたどることは比較的知られていますが、肺がんにおいて、炎症が治療経過や予後に影響を与えるかについては、未だ不確定な状況です。

　そこで、本研究の目的は、炎症の一つである閉塞性肺炎が肺がんの経過に影響を与えうるかを調べることになります。

3.1.研究の意義:

閉塞性肺炎を伴う病理病期T2N0M0非小細胞肺がん患者さんの手術後の経過と閉塞性肺炎を伴わない病理病期T2N0M0非小細胞肺がん患者さんの手術後の経過を比較することで、閉塞性肺炎を伴う患者さんの経過や予後を予想する上での一助としたいと考えております。

3.2.目的:

本研究は、病理病期T2N0M0非小細胞肺がん患者さんの手術検体で、閉塞性肺炎を合併している場合に術後の経過がどのようであったかを調べることを目的としています。将来的にはこの研究データの結果が肺がんの診療に携わる医師や患者さんに広く利用され、より効率的な治療を進められるようになると考えております。

方法: 本研究は国立研究開発法人　国立がん研究センター東病院　呼吸器内科および呼吸器外科の肺がんデータベースから対象となる資料を抽出することで

情報を収集します。情報収集の作業を行う人員は、医師をはじめとした医療従事者です。この作業で収集した情報に基づき、閉塞性肺炎の有無による肺がんの予後の違いについて検証を行います。

3.3.研究資金：
今回の研究に関わる資金は特にありません。

4.1.個人情報保護に関する配慮:
閲覧する診療録には個人情報が含まれますが、生年月日や氏名等の患者さん個人が特定される情報は削除した上で、資料を保存します。また、今回の研究で得たデータを、その他の研究目的で使用することはありません。
今回の研究から得られた結果は、学会発表や論文公表を予定しております。患者さん等からのご希望があればその方の診療録は研究に利用しないようにしますので、いつでも次の連絡先まで申して出てください。

照会先および研究への利用を拒否する場合の連絡先:
〒277-8577 千葉県柏市柏の葉 6-5-1
国立研究開発法人　国立がん研究センター東病院 呼吸器内科
石橋昌幸、梅村茂樹
FAX 04-7131-4724/TEL 04-7133-1111